

Prognostic Significance of Expression of the Epithelial-Mesenchymal Transition-Related Factor Brachyury in Intrathoracic Lymphatic Spread of Non-Small Cell Lung Cancer

島松, 晋一郎

<https://hdl.handle.net/2324/1866273>

出版情報：九州大学, 2017, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

(別紙様式2)

氏名	島松 晋一郎
論文名	Prognostic Significance of Expression of the Epithelial-Mesenchymal Transition-Related Factor Brachyury in Intrathoracic Lymphatic Spread of Non-Small Cell Lung Cancer
論文調査委員	主査 九州大学 教授 岩城 徹 副査 九州大学 教授 中西 洋一 副査 九州大学 教授 田口 智章

論文審査の結果の要旨

Brachyury遺伝子は、発生において上皮間葉転換（EMT）を介して重要な役割をする転写調節因子であり、腫瘍での過剰発現が知られている。本研究では非小細胞肺癌患者において、転移を認めた肺門および縦隔リンパ節のBrachyury蛋白の発現の予後的意義を調べた。外科的に切除された原発性肺癌115例とその転移リンパ節におけるBrachyury遺伝子の発現を免疫組織化学的染色により評価した。さらにBrachyury蛋白の発現と患者の臨床病理学的因子や予後との関係を分析した。転移リンパ節におけるBrachyury蛋白の発現は、原発腫瘍よりも有意に高発現であった。転移リンパ節のBrachyury蛋白が高発現の患者は、低発現の患者より有意に予後不良であった。また、転移リンパ節と原発腫瘍のBrachyuryタンパク発現の差が大きい患者は、差が小さい患者より有意に予後不良であった。転移性リンパ節におけるBrachyury蛋白の発現は、EMT関連遺伝子と有意に相関を認めた（E-cadherin [負の相関]、Slug [正の相関]、IL-8 [正の相関]）。胸腔内リンパ節中の転移性癌細胞におけるBrachyury蛋白の高発現は、肺癌患者の予後不良と関連を認めた。Brachyury遺伝子は、リンパ節転移の過程で高発現となり、さらなる転移や進展能を獲得する可能性が考えられた。

以上の成績はこの方面の研究に知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが概ね適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定した。